

博士学位論文

母の育児負担感緩和のための父の親性に関する研究

平成 27 年 3 月

森永 裕美子

岡山県立大学大学院

保健福祉学研究科



博士学位論文

母の育児負担感緩和のための父の親性に関する研究

平成 27 年 3 月

森永 裕美子

岡山県立大学大学院

保健福祉学研究科

## 要 旨

本研究では、幼児健康診査の実施場面等で行う父母への育児支援の向上に資することをねらいとし、1歳6か月時と3歳6か月時の父の親性を明らかにすること、そしてその父の親性が、母の育児負担感の緩和にどのように関連しているのかを明らかにすることを目的とした。

前記の目的を達成するために、①1歳6か月時における父の親性と母の育児負担感との関連、また②子どもが生まれてから3歳6か月時までに父が親になることについてどのような内面（意識）と行動の変化があるのか、さらに③3歳6か月時における父の親性と母の育児負担感との関連を検討することを課題とした。

まず第1の課題を達成するために、調査期間中の1歳6か月児健康診査を受診する児の父母1,462件を対象に無記名自記式質問紙調査を実施し、父母の属性（年齢、職業等）、父の親性検討項目23項目、母の育児負担尺度項目（8項目）、母の育児サポート認知尺度項目（10項目）について回答を求めた。回収した調査票914件のうち、欠損値等を除いた767件を有効回答として分析を行った。父の親性検討項目23項目から、探索的因子分析を行った結果、父の親性因子として「役割遂行への適応感」「役割期待への受容」「人間的成長・責任感」「児に対する親和性」の4つの下位概念が明らかとなった。

そして1歳6か月時の父の親性と母の育児負担感との関連の検討では、まず父の親性が母のサポート認知を介して母の育児負担感に影響を及ぼす一連のモデルを推定し、モデルの検証を行った。その結果、1歳6か月時では、父の親性が高まることにより、直接母の育児負担感を緩和することと、父の親性が高まるほど母が父の育児サポートを受けていると認知し、母の育児負担感が緩和されることが明らかとなった。

次に第2の課題を達成するために、父がどのように父らしくなるのかを、3歳6か月時で父自身の内面（意識）と行動の両面から検討した。1歳6か月時で2年後の調査協力が得られた父母のうち、面接によるインタビューへの同意が得られた11

組の父を対象とし、父自身が“父らしくなったと感じたところ”についてインタビューを行い、質的帰納的に分析した。

内容分析の結果、35の2次コード、9つのサブカテゴリ（「 」、『 』）及び2つの中心的概念（【 】【 』）が生成できた。父は、「母とのやり方の違い」などに『父の中で葛藤』し、『バランスをとる』ことにより【父が折り合いをつける】ことをしていた。また、「父としての子どもの関わり」の中などで『役割を遂行する』、『父として実感する』ため、【父として自覚】するようになっており、これらの自覚や折り合いをつけることにより、父らしくなっていた。

最後に第3の課題を達成するために、1歳6か月児健康診査時で2年後の3歳6か月時で調査協力が可能と回答した父母293件に1歳6か月時と同様の無記名自記式質問紙調査をした。92件の有効回答分を分析対象とし、父の親性検討項目23項目の確認的因子分析を行った結果、「夫婦の関係性」「父としての自覚」「児への親愛性」という3つの下位概念をもつことを見出し、1歳6か月時と3歳6か月時では、父の親性の下位概念が異なっていることが明らかになった。また、3歳6か月時の父の親性と母の育児負担感の関連についての検討では、1歳6か月時と同様のモデルを推定し検討した。結果、3歳6か月時では、父の親性が直接、母の育児負担感に関連するのではなく、父からの育児サポートの認知を介して母の育児負担感が緩和されることが明らかになった。

以上、本研究では、父の親性が育児の経験、父自身の成長、母との関係性等の中で変化をしていくものであり、母の育児負担感の緩和には、父の親性の高まりの必要性と、子どもの年代に応じて変化する父の親性が高まるほど、母が父を肯定的に受け容れることを助長し、父からの育児サポートを受けていると認知することが、母の育児負担感に影響を及ぼすと示唆された。

これらは、幼児健康診査の場面で、保健師らが父の親性が1歳6か月児と3歳6か月時では違うことを考慮した助言とすることや、父が父らしくなるために折り合いや自覚が伴うことなどを父自身に伝えると共に母にも認識してもらうよう促すなど、父母への具体的な助言をする際の知見として有用な示唆が得られた。



# 目 次

## I. 序論

第1章 研究背景	1
第1節 育児期における母の育児負担感の現状と課題	1
第2節 育児期における父の育児参加の現状と課題	2
第2章 研究動向	3
第1節 母の育児負担感に関する研究動向	3
第2節 父の育児に関する研究動向	3
第3章 研究目的	8

## II. 本論

第1章 1歳6か月時における父の親性と母の育児負担感との関連	9
第1節 研究目的	9
第2節 研究Ⅰ-1 1歳6か月時の父の親性の検討	9
第3節 研究Ⅰ-2 1歳6か月時の父の親性と母の育児負担感との関連	17
第2章 3歳6か月までに父が親になることの内面（意識）と行動の変化	21
第1節 研究目的	21
第2節 研究方法	21
第3節 研究結果	22
第4節 考察	27
第3章 3歳6か月時における父の親性と母の育児負担感との関連	31
第1節 研究目的	31
第2節 研究Ⅲ-1 3歳6か月時の父の親性の検討	31
第3節 研究Ⅲ-2 3歳6か月時の父の親性と母の育児負担感との関連	38
第4節 考察	41

III. 結論	43
---------	----

IV. 実践への示唆	45
------------	----

V. 研究の限界と課題	46
-------------	----

VI. 引用文献	47
----------	----

謝 辞	53
-----	----



# I 序論

## 第1章 研究背景

### 第1節 育児期における母の育児負担感の現状と課題

育児不安や育児負担感を抱える母及び不適切な育児をしている母への適切な対応は、地域母子保健の重要な課題の一つである。

最近では、育児情報も豊富になり、育児サービスも充足した時代となってきたが、母子で家に引きこもり、孤立しがちで、育児不安が起因となって母が不適切な養育に至る傾向がある<sup>1)</sup>。特に母による不適切な養育の好発時期は、子どもの自我が芽生える時と著明に発達する時であり、母と子どものやり取りが活発になり、互いに思い通りにならず危機的状況に陥る可能性が高い<sup>2)</sup>。子どもへの不適切な養育や虐待事例件数の増加もあり、その背景には母の育児負担感などが要因として指摘される<sup>3)4)</sup>。母の育児負担感の緩和には「父」が大きく影響しているため<sup>5)~8)</sup>、父に焦点をあてて緩和策を検討していくことは重要である。

このため、現在我が国の母子保健法による幼児健康診査（以下、幼児健診という）は、1歳6か月時と3歳～3歳6か月時に、成長・発達の異常や遅れの早期発見と、虐待予防、育児支援を位置づけている。したがって、この時期に不適切な養育の予防を意図した介入（助言等）を行う必要性と重要性は高い。

しかし、幼児健診では、母が対象児を連れて受診することが多く、母に対してのみ助言を行うことになり、それだけでは根本的解決にならないこともある。また、現行のパパ・ママスクール等の育児教室は、出産直後から乳幼児期の育児知識・技術を中心とした内容が多く、父親を対象とした幼児期の育児に関する教育は普及していない。

このため、母だけでなく母と共に子育てを行う父の存在にも着目した助言や支援の必要性がある。

## 第2節 育児期における父の育児参加の現状と課題

1999年、男女共同参画社会基本法の成立を受けて、職場・家庭・地域等における慣行の見直しが基本計画に盛り込まれた<sup>9)</sup>。さらに「少子化対策プラスワン」<sup>10)</sup>で、男性を含めた働きながら子育てする人の働き方の見直しや、多様な働き方の実現、仕事と子育ての両立を目指し、子育て期間中の残業時間の短縮や、父の最低5日間の産後休暇の取得、男性の育児休業取得率10%を目標としてきた。

2003年からは、次世代育成対策推進法に基づく計画的な取り組みも始まり、父の育児参加が重視されている。子育て支援が国の施策となり、父の育児参加は「イクメン」と称され、“父も育児する時代”は定着しつつあるものの、2008年に実施され2010年に発表された「第4回全国家庭動向調査」結果<sup>11)</sup>では、未だに育児は母の役割との認識が強く、育児の80%以上を担う母が、いずれの年代においても70%前後となっている。

このように政策の中で父の育児参加は推進されているものの、2012年の男性育児休業取得率は1.89%と低く、2011年調査時からの3年を経過してもなお、0.17%しか上昇していない実情である。つまり、父の育児参加を推奨しながらも、育児に積極的に取り組める社会環境でない中での父の育児参加実態であると言える<sup>12)</sup>。

父の多くは、男性の家庭役割分担に理解を示しているにもかかわらず、「3歳までは母が育児に専念すべき」を肯定する者が8割を占め<sup>13)</sup>、自分は母の手伝い感覚であること<sup>14)</sup>、母の育児をサポートするという潜在的意識があることが指摘されている<sup>15)</sup>。とは言え、父が親として自覚し、母と共に家族としての機能を発揮することが期待されており<sup>16)</sup>、父自身も人間的に成長し、親として発達している必要がある<sup>17)</sup>。出生直後には“父としての”意識や自覚が高まっており<sup>18)</sup>、その後育児経験によって父も成長することは明らかになってきたが<sup>19)</sup>、父の親性はどのように発達するのか、さらに、父の親性が母の育児負担感にどのように影響するのかについては明らかではない。したがって、次章では、母の育児負担感、父の育児参加による母と子どもへの影響、父の親性について先行研究を概観する。

## 第2章 研究動向

### 第1節 母の育児負担感に関する研究動向

母の育児負担感に関しては、1980年代から「育児不安」というキーワードで研究が進められた。育児不安を測る尺度開発<sup>20)</sup>、母の育児不安の緩和のための効果的な支援として母に対する父の精神的あるいは情緒的、直接的（手段的）サポート<sup>5)16)</sup>やソーシャルサポート<sup>21)</sup>、父の育児への理解<sup>14)</sup>の必要性などについて明らかにされている。

このような母への精神的あるいは情緒的サポート、直接的（手段的）サポート（以下、育児サポートという。）は、母に“夫婦で一緒に子育てをしている”という実感を与え、母の自己効力感、育児への満足感、精神的健康度を上げて育児負担感は緩和されている<sup>21)22)</sup>。

さらに、育児負担感の緩和には、夫婦関係の良好さや夫婦間のコミュニケーションと<sup>6)7)16)</sup>、父からの育児サポートを得ているという肯定的認知の必要性かつ重要性が報告されている。すなわち、母は、父と共に子育てをしていると感じる夫婦関係の良好さや、父からの育児サポートの状況について、認知をすることが重要であると言える。

### 第2節 父の育児に関する研究動向

#### 1) 父の育児参加による母と子どもへの影響

子どもを持つ父に関する研究は、1975年以降、米国で増えてきた。その背景には、女性の就労率増加に伴い、男性の育児参加、家事参加の必要性<sup>23)</sup>がある。女性だけが育児・家事・仕事をこなすのではなく、男性も育児・家事に参加して、家庭内サポートシステムを作り上げることが不可欠という考え方に発展してきた<sup>24)25)</sup>。当然、女性が社会進出するということで、従来からの家庭内・夫婦間の役割に対する性役割の考え方の転換を余儀なくされ、ジェンダー・イデオロギーに

関する研究が蓄積されてきた<sup>26)~28)</sup>。

日本においては、1990年中盤以降から父親研究が増えている。近年の少子化・核家族化及び米国と同様の女性の就労率の高まりによる共働き夫婦の増加が背景にあり、そのために性役割意識の変化や国の施策としての父の育児参加推奨により、父の育児参加が広く周知されてきた。しかしながら、育児が母の役割であるという考えも根強く残り、母の育児負担感緩和が喫緊の課題となったため、母の育児不安や育児ストレスと父（夫）の育児参加の関連を明らかにした研究は多い<sup>5)14)16)20)29)30)</sup>。

具体的には、母のサポート源としての父に着目し、母の育児不安の軽減には、父の手段的・精神的の物心両面からの育児参加<sup>5)16)</sup>や夫婦間のコミュニケーション度合いが影響し<sup>30)31)</sup>、父及び夫としての役割を果たすことの重要性が指摘された<sup>32)</sup>。母との関係については、母が成長・発達することへの影響<sup>34)</sup>、良好な夫婦関係となること<sup>35)36)</sup>などの報告もある。

次に、父の育児と子どもの関係については、父が子どもと接する時間の長いこと、子どもの判断能力や相手の感情を理解する能力が高いこと<sup>39)</sup>や、父が子どもと積極的に接することが、子どもの社会性の高まりと責任感の向上などに貢献していることが明らかになっている<sup>33)</sup>。

そして、父の育児を促進する要因として、父の育った環境、子どもの年齢が小さいこと、子どもの数が多いこと<sup>37)</sup>、母が就労していること<sup>38)</sup>などがあげられている。

## 2) 父の親性について

次に、親性について見てみると、「親になることにより発達する個人の人格的特性」<sup>43)</sup>、「親になることを“子どもを出産し養育していく役割を獲得していくこと”と捉え、そのことによって生ずる様々な変化を親の発達とし、その内容を“親性”，また親になって起こる変化を“親性の発達”とする」<sup>40)</sup>など、多様である。これら、多様な定義のもとに開発された尺度については、父母双方を対象とした親性発達尺度開発<sup>40)41)</sup>、親性発達に影響する因子を抽出したもの<sup>34)40)42)</sup>がある。例えば、鮫島<sup>43)</sup>の親性尺度は妊娠中期を対象とし、男性性と女性性から親になるイメージ変化に焦点をあてている。大橋<sup>41)</sup>らは0歳から6歳児をもつ親を対象に、親性の構成概念を自己への認識（親役割の状態と親役割以外の状態）と子どもへの認識の3面から捉えた育児期の親性尺度を開発している。

父の親性については、父親になる意識・自覚の形成過程<sup>18)29)44)</sup>が明らかになっており、父親となる発達尺度<sup>45)</sup>も開発されているが、子どもの発達や年代との関連については明らかではなく、幼児健診対象時期の1歳6か月時及び3歳6か月時の父の親性については報告されていない。したがって、幼児（1歳6か月時と3歳時）を育てている父の親性とは何かを明らかにし、測定できる尺度を開発する必要がある。

## 3) 父の育児参加による父自身への影響

1990年代からは、父の育児ストレスに関する研究が増えてきた。その多くは身体障がい<sup>46)</sup>や自閉症などの疾患のある児の父や<sup>47)</sup>、低所得者である父を対象<sup>48)</sup>として、「育児」以外にストレス反応が起こりうるような条件がある中で「育児ストレス」をみているものであった。

一方、育児における父の役割やその認知<sup>49)</sup>、世話役割や子ども・家族を守るという自覚から、経済的な部分で責任感をもつ稼ぎ手役割を認知することが明らかになっている<sup>50)</sup>。育児期にある父は社会的にも責任が増す時期であり、家庭役割

と職業役割の間で葛藤を起しつつも<sup>51)</sup>, 仕事へのコミットメントや職業アイデンティティの獲得ができ, 人格的にも成長していることが明らかとなった<sup>50)52)</sup>。しかし, 先述したように, 親性の定義そのものが多様であり, 父の親性についても統一性はない。

以上の研究動向から, 母の育児負担感の緩和に関しては様々な角度から追及されているが, 母に影響を大きく与える父については, どのような親性を持ち, 父の親性が母の育児負担感にどのように関連しているのかは明らかになっていない。さらにその父の親性について, 父自身へ還元できる具体的な内容を示されたものは見当たらない。母の育児負担感を緩和するためにも, 父の親性が具体的になることで, 父の親性を高められるような助言・サポートが可能となると推察される。

以上の文献検討結果から, 本研究における親性は, 子どもを育てる中で変化していく親役割を遂行しながら得られる人格的特性として操作的に定義し, 研究課題を整理した結果の研究枠組みを図 1 に示す。

すでに父からのサポート認知によって母の育児負担感が緩和されることは明らかになっている。しかし, 父の親性が, 母のサポート認知及び母の育児負担感にどのように影響するか, 一連の全体像としては明らかになっていない。

以上のことから, 母のサポート認知及び母の育児負担感については, 既存の尺度を用い, 変化する父の親性を明らかにするための 1 歳 6 か月時及び 3 歳 6 か月時における父の親性尺度を開発した後, 父の親性と母のサポート認知及び母の育児負担感との関連を検討する必要がある。

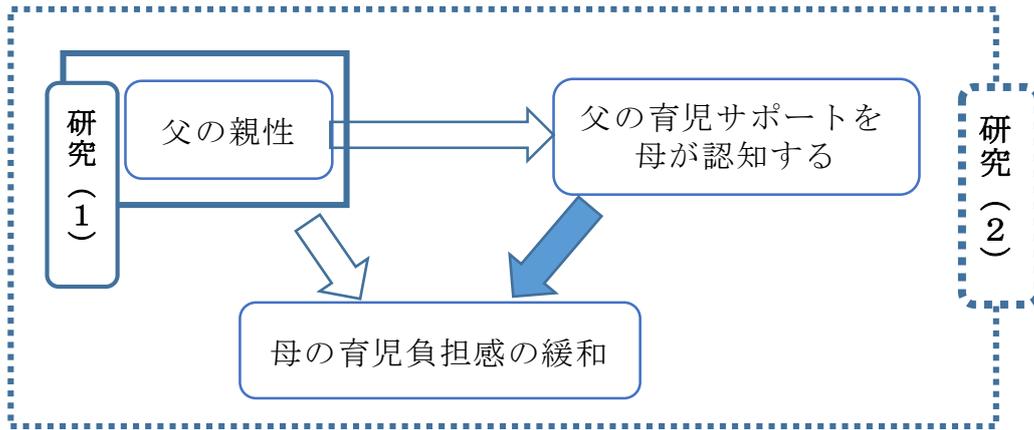


図1 研究枠組み

### 第3章 研究目的

児の成長・発達が著しく重要な時期である1歳6か月及び3歳6か月時に、健やかな成長・発達を目指す育児への助言内容に寄与することをねらいとして、1歳6か月時と3歳6か月時の父の親性を明らかにすること、そしてその父の親性が、母の育児負担感の緩和にどのように関連しているのかを明らかにすることを目的とした。親性については、先行文献<sup>40)43)</sup>を参考に、本研究では子どもを育てる中で、変化していく親役割を遂行しながら得られる人格的特性と操作的に定義した。

上記の目的を達成するために、研究Ⅰとして、1歳6か月時の父の親性と母の育児負担感との関連を明らかにする。次に研究Ⅱとして、父の親性は変化することを想定し、3歳6か月までに父が親になることについてどのような内面（意識）と行動の変化があるのかを明らかにする。

最後に研究Ⅲとして、3歳6か月時における父の親性と母の育児負担感との関連について検討することとした。

なお、研究Ⅰ及び研究Ⅲにおいては、子どもの年代に応じた父の親性尺度の開発を行った後に、母の育児負担感との関連を検討することとした。

#### 《研究の構成》

**研究Ⅰ** 1歳6か月時の父の親性と母の育児負担感との関連

研究Ⅰ-1 1歳6か月時の父の親性の検討

研究Ⅰ-2 父の親性と母の育児負担感との関連

**研究Ⅱ** 3歳6か月までに父が親になることの内面（意識）と行動の変化

**研究Ⅲ** 3歳6か月時の父の親性と母の育児負担感との関連

研究Ⅲ-1 3歳6か月時の父の親性の検討

研究Ⅲ-2 父の親性と母の育児負担感との関連

## Ⅱ 本論

### 第 1 章

#### 1 歳 6 か月時における父の親性と母の育児負担感との関連（研究 I）

##### 第 1 節 研究目的

1 歳 6 か月児を持つ父の親性（親であること）の因子構造を探索し，その親性因子と母の育児負担感との関連について明らかにする。

##### 第 2 節 研究 I-1 1 歳 6 か月時の父の親性の検討

###### 1) 研究方法

###### (1) 調査対象

調査期間中（2006 年 8 月～9 月）の K 市 1 歳 6 か月児健康診査対象児（2005 年 1 月～4 月生まれ児）を持つ父母 1,462 件を対象とした。

###### (2) 調査方法

1 歳 6 か月児健康診査の受診案内及び健康診査問診票送付時に無記名自記式調査票・返信封筒を同封し配布した。研究担当者が健康診査当日，会場にて回収ボックスを用いて回収した。

###### (3) 調査内容

対象者の属性（年齢，子どもの数，職業等）及び父の親性検討項目 23 項目（表 1）とした。

「父の親性検討項目」は，及川<sup>52)</sup>の親性発達尺度（6 因子 40 項目）と岩田<sup>53)</sup>の父親役割への適応におけるストレス測定尺度（5 因子 27 項目）を参考に 23 項目を選定し，「全くそう思わない；0 点」から「非常にそう思う；3 点」の

4件法とし、得点が高いほど、親性が高いとした。

#### (4) 分析方法

父の親性検討項目 23 項目について、確認的因子分析を行った。

分析ソフトは、SPSS21.0forWindows 及び Amos21.0 を用いた。

#### (5) 倫理的配慮

調査は無記名の自記式とした。負担を最小限にするために項目数を絞り、回答はあくまでも対象者の意思決定を尊重し、拒否する権利を有し、拒否した場合も不利益は被らないこと、守秘義務を遵守すること、目的外使用はしないことを明記し、厳封した返信による回答をもって承諾とした。

なお、調査に先立ち、岡山県立大学倫理委員会の承認を得た。

**表1 父の親性検討項目23項目**

X-1	私は、子どもへの愛情が深いと思う
X-2	私は父親であることを楽しんでいる
X-3	子どもの成長が楽しみである
X-4	私は子どもの生活リズムに合わせていると思う
X-5	私は、自分を犠牲にしていると思う
X-6	子どもが生まれて友人と過ごす時間が少なくなりさびしい
X-7	子どもが生まれて家族を大切にしたいという気持ちが高まった
X-8	夫婦間でのコミュニケーションはとれていると思う
X-9	子どもが生まれてから妻の成長を感じる
X-10	子どもが生まれてから私は人間的に成長したと思う
X-11	妻が私に何を期待しているのか分からず、イライラすることがある
X-12	育児についての妻からの期待は、私には負担である
X-13	子どもが生まれてから夫婦間にもめ事の機会が増えた
X-14	妻の悩みを聞くのは負担である
X-15	子どもが生まれてからいろいろとやるが増えたので、疲れ気味である
X-16	家事の手伝いは負担である
X-17	仕事への意欲が高まった
X-18	子どもが生まれてから私は忍耐強くなったと思う
X-19	父親としての責任を感じる
X-20	子どものよき父親になりたいと思う
X-21	子どもが生まれてから何か思い通りにいかずにイライラする
X-22	イライラするとつい子どもにあたってしまう
X-23	子どもが泣いていても、何を求めているのか分からず困る

## 2) 研究結果

### (1) 対象者

対象となる父母 1,462 件に質問票を配布し，914 件の回答が得られた。そのうち欠損値等のある不適切なデータを除いた 767 件を分析のデータに用いた。対象者の属性は，表 2 に示した。

父の年齢は平均 32.5 歳 (SD±5.1)，母の年齢は平均 31.0 歳 (SD±4.4) であった。子どもの出生順位は，第 1 子が 51.9%，第 2 子が 36.4%，第 3 子が 10.3%，第 4 子 1.3% であった。子どもの数は，1 人が 47.2%，2 人が 39.9%，であった。

父の職業は，製造業が最も多く 29.3%，他には建設業 15% であった。母の仕事従事状況は，専業主婦が 65.4% と半数以上を占めており，次いで常勤 17.3%，パート・アルバイト 14.6% であった。

### (2) 1 歳 6 か月時の父の親性因子の抽出

父の親性検討項目 23 項目で項目間の相関が高すぎたものを削除し，先行研究及び専門家間でのディスカッションにより父の親性検討項目 23 項目を 16 項目 4 因子で構成し，「役割遂行への適応感」「役割期待への受容」「人間的成長・責任感」「児に対する親和性」と仮定して，確認的因子分析を行い検討し，結果を表 3 及び図 2 に示した。

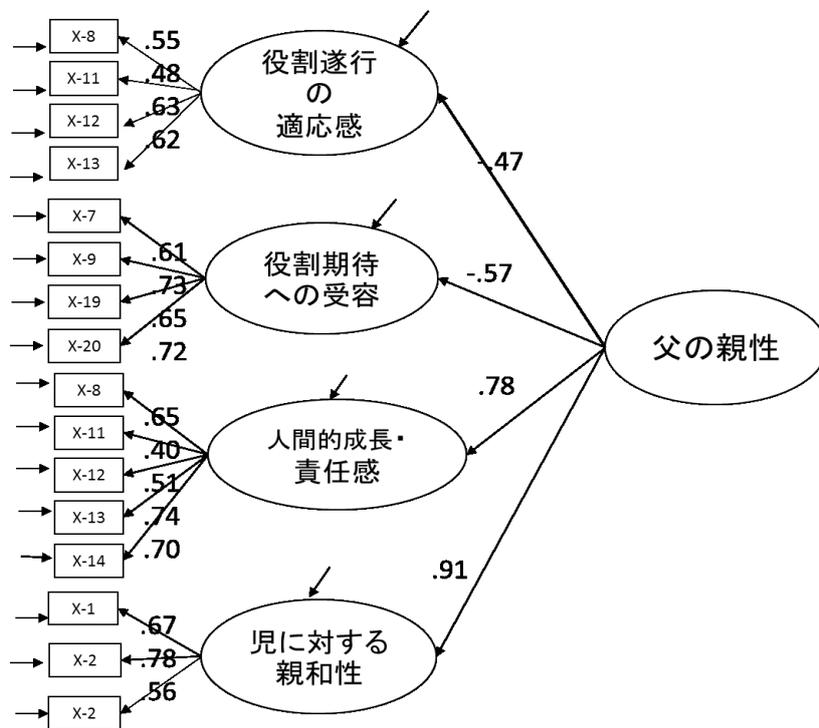
「役割遂行への適応感(4 項目)」内的整合性を示す Cronbach の  $\alpha$  信頼係数 (以下  $\alpha =$  とする) は， $\alpha = 0.66$ ，「役割期待への受容 (4 項目)」 $\alpha = 0.77$ ，「人間的成長・責任感 (5 項目)」 $\alpha = 0.75$ ，「児に対する親和性 (3 項目)」 $\alpha = 0.70$  であり，親性因子として仮定できると判断した。モデルの適合度を示す RMSEA = .079，CFI = .86 であり，概ね妥当なモデルとの結果を得た。

表2 1歳6か月時 対象者の属性(n=767)

		人	%
父の年齢 平均値32.5(±5.1)	10代	1	0.1
	20～25歳	53	6.9
	26～30歳	21	27.4
	31～35歳	313	40.8
	36～40歳	137	17.9
	41～45歳	47	6.1
	46～50歳	6	0.8
母の年齢 平均値31.0(±4.4)	10代	3	0.4
	20～25歳	76	9.9
	26～30歳	256	33.4
	31～35歳	329	42.9
	36～40歳	89	11.6
	41～45歳	14	1.8
	46～50歳	0	0
父職業	鉱業	11	1.4
	建設業	115	15.0
	農林漁業	2	0.3
	製造業	225	29.3
	運輸業	65	8.5
	卸売・小売	54	7.0
	飲食・宿泊	17	2.2
	医療・福祉	41	5.4
	教職	11	1.4
	公務員	40	5.2
	サービス業	107	14.0
	情報通信	21	2.7
	その他	58	7.6
母の仕事	専業主婦	502	65.4
	パート・アルバイト	112	14.6
	内職	6	0.8
	自営業	14	1.8
	常勤	133	17.3
出生順位	第1子	398	51.9
	第2子	279	36.4
	第3子	79	10.3
	第4子	10	1.3
	第5子	1	0.1
子どもの数	1人	362	47.2
	2人	306	39.9
	3人	87	11.3
	4人	11	1.4
	5人	1	0.1

表3 1歳6か月時 父の親性因子(4因子16項目)

因子名		
役割遂行への 適応感 Cronbach $\alpha$ =0.66	X-5	私は、自分を犠牲にしていると思う
	X-6	子どもが生まれて友人と過ごす時間が少なくなりさびしい
	X-15	子どもが生まれてからいろいろとやるが増えたので、疲れ気味である
	X-21	子どもが生まれてから何か思い通りにいかずにイライラする
役割期待への 受容 Cronbach $\alpha$ =0.77	X-11	妻が私に何を期待しているのか分からず、イライラすることがある
	X-12	育児についての妻からの期待は、私には負担である
	X-13	子どもが生まれてから夫婦間にもめ事の機会が増えた
	X-14	妻の悩みを聞くのは負担である
人間的成長・ 責任感 Cronbach $\alpha$ =0.75	X-7	子どもが生まれて家族を大切にしたいという気持ちが高まった
	X-10	子どもが生まれてから私は人間的に成長したと思う
	X-17	仕事への意欲が高まった
	X-19	父親としての責任を感じる
	X-20	子どものよき父親になりたいと思う
児に対する 親和性 Cronbach $\alpha$ =0.70	X-1	私は、子どもへの愛情が深いと思う
	X-2	私は父親であることを楽しんでいる
	X-3	子どもの成長が楽しみである



RMSEA=.079 CFI=.86 GFI=.91 AGFI=.88

\*図の煩雑さを避けるため、誤差変数の表示は省略している。

図2 1歳6か月時における父の親性因子(確認的因子分析, 標準化係数)

### 3) 考察

#### (1) 父の親性 4 因子について

及川の親性発達尺度<sup>52)</sup>の構成因子や岩田らのストレス測定尺度<sup>53)</sup>、小野寺らの父親になる意識構造因子<sup>29)</sup>などは、妊娠期から生後1歳未満の「父になること」へ焦点をあてていたため、父になる喜びや実感、不安が検討された因子内容であった。本研究では、親性因子の確認的因子分析結果から、モデルの適合度もよい【役割遂行への適応感】【役割期待への受容】【人間的成長、責任感】【児に対する親和性】の4つの因子の妥当性が確認できた。この4因子は、前述の先行研究の因子構造と同様のものを含んでいるが、妊娠期と1歳6か月期との相違があるため、「父になってから」の親性因子として説明できるように因子名を命名した。

【役割遂行の適応感】因子は、逆転項目因子であり「私は自分を犠牲にしていると思う」「子どもが生まれて友人と過ごす時間が少なくなりさびしい」「子どもが生まれてからいろいろとやるが増えたので疲れ気味である」「子どもが生まれてから何か思い通りにいかずにイライラする」の4項目で構成した。1歳6か月児を持つ父は、親役割認知及び自己との一致度や、性役割に対する態度が関連する育児ストレスを感じている<sup>13)</sup>。父は役割を遂行することに関して、漠然と認知しているからこそストレスに感じるのではないか。小野寺<sup>29)</sup>の「制約感」や及川<sup>52)</sup>の「抑うつ因子」の構成項目は、本研究の構成項目と同様であるが、親としての役割を遂行しようとしながらも、うまく適応できにくい状況を示したものと捉え、「制約感」や「抑うつ因子」を包含する広い概念と考えられた。親役割を肯定的に受け入れることで、「親になった」という意識が強まることから<sup>33)</sup>、【役割遂行への適応感】が親性因子として妥当と考えた。

【役割期待への受容】は、逆転項目因子で「妻が私に何を期待しているのかわからず、イライラすることがある」「育児についての妻からの期待は私には負担である」「子どもが生まれてから夫婦間にもめ事が増えた」「妻の悩

みを聞くのは負担である」という 4 項目で構成され、妻からの役割期待に対するプレッシャーを示す内容であった。父親としての役割受容の必要性は頭で理解しているため、受容と負担感の間で役割葛藤が生じると考えられる。夫婦間でお互いの役割分担の領域について、よく話し合い合意することが必要で、夫婦間のコンセンサスづくりが大切であると言われており<sup>35)</sup>、夫婦間での話し合いができる関係性のもと、父として期待される役割を受容していくことが親性因子として妥当と考える。

【人間的成長・責任感】は、「子どもが生まれて家族を大切にしたいという気持ちが高まった」「子どもが生まれてから私は人間的に成長したと思う」「仕事への意欲が高まった」「父親としての責任を感じる」「子どものよき父親になりたいと思う」で、親となってからの責任を自覚することを示す 5 項目で構成した。Grossmann, Pollack, & Golding<sup>58)</sup> や小野寺<sup>29)</sup> らも、親として子どもを育てるには、社会人として自律して仕事を行い、責任をもって一家を支えて自律性 (Autonomy) が不可欠であることや、父親になることによる発達の内容の 1 つとして責任感<sup>42)</sup> があるとされており、本研究でも合致していると判断した。

【児に対する親和性】は、「私は子どもへの愛情が深いと思う」「私は父親であることを楽しんでいる」「子どもの成長が楽しみである」という児に対する愛情を説明する 3 項目である。子どもに対して思いやりや慈しみの気持ちと子どもへの愛情を認識し、子どもに対して肯定的に捉える気持ちであると言える。親和性 (Affiliation) という人格的要因は親意識に関連することから<sup>58)</sup>、親性因子として妥当であると判断した。

#### 4) 結論

1歳6か月時における父の親性は、【役割遂行の適応感（4項目）】【役割期待への受容（4項目）】【人間的成長・責任感（5項目）】【児に対する親和性（3項目）】の4因子16項目であることが明らかになった。

### 第3節 研究I-2 1歳6か月時の父の親性と母の育児負担感との関連

#### 1) 調査内容

調査内容は、①対象者の属性（年齢、子どもの数、職業等）、②父の親性（4因子16項目；研究I-1）、③母の育児負担感（母の育児負担感尺度<sup>54)</sup>）、④父の育児サポートに関する母親の認知尺度<sup>55)</sup>とした。

父の親性尺度は、研究I-1で明らかにした【役割遂行への適応感（4項目）】【役割期待への受容（4項目）】【人間的成長・責任感（5項目）】【児に対する親和性（3項目）】の4因子で、「全くそう思わない；0点」～「非常にそう思う；3点」の4件法とし、得点が高いほど父の親性が高いものとした。

「母の育児負担感尺度」は、中嶋他<sup>54)</sup>の尺度を用いた。母親の児に対するネガティブな感情（否定的感情認知4項目）と育児に伴う母親自身の社会的活動の制限に関連した内容（社会的活動制限の認知4項目）が測定できる。信頼性・妥当性が確認されている。「全くない；0点」から「いつもある；4点」の5件法で、得点が高いほど、母の育児負担感が高いことを示す。

「父の育児サポートに関する母親の認知尺度」は、中嶋他<sup>55)</sup>の尺度を用いた。父の精神的サポート（4項目）、手技的サポート（4項目）、情報提供的サポート（2項目）に対しての母の認知を、「とても期待できる；2点」から「期待できない；0点」の3件法で、得点が高いほど育児サポート認知が成されていることを示す。信頼性・妥当性が確認されている。

#### 2) 研究方法

父の親性と、母の育児サポート認知及び母の育児負担感との関連について、共分散構造分析のパス解析を行い検討した。分析ソフトは、SPSS21.0forWindows及びAmos21.0を用いた。

倫理的配慮は、無記名自記式調査とし、回答は対象者の意思決定を尊重、拒否

する権利を有し、拒否した場合も不利益は被らないこと、守秘義務を遵守、目的外使用はしないことを明記し、厳封した返信による回答をもって承諾とした。なお、調査に先立ち、岡山県立大学倫理委員会の承認を得た。

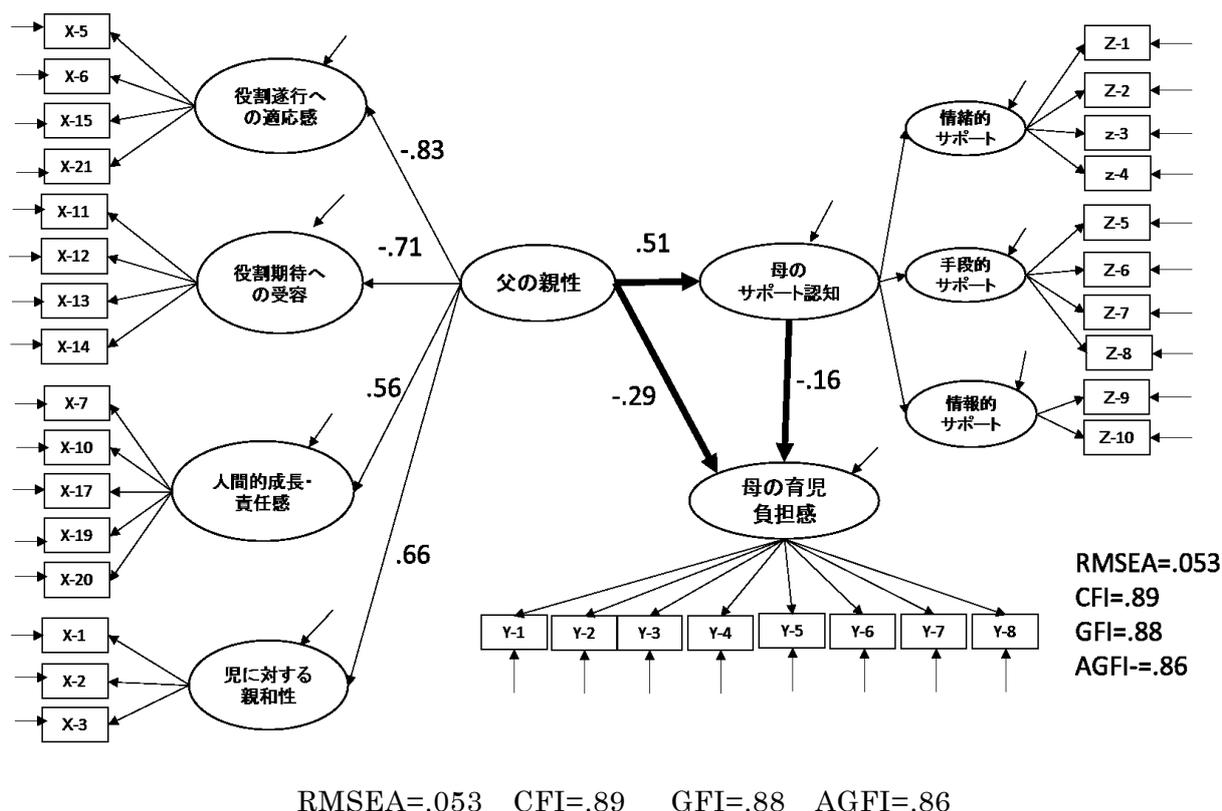
### 3) 結果

#### (1) 対象者

対象となる父母 1,462 件に質問票を配布し、914 件の回答が得られた（回収率 62.5%）。そのうち欠損値等のあるデータを除いた 767 件を分析対象とした。基本属性は、研究 I-1 表 2 のとおりである。

#### (2) 1 歳 6 か月時の父の親性と母のサポート認知、母の育児負担感との関連

父の親性と母の育児負担感との関連の結果を図 3 に示した。父の親性得点が高いと、母の育児負担感得点が高まることと、父の親性得点が高いと、母は父からのサポート認知得点も高まり、母の育児負担感得点が高まるという結果を得た。0.05 以下であればモデルの当てはまりがよいと判断される RMSEA = .053 であり、0.9 以上がデータをよく説明していると判断される CFI , GFI, AGFI は、CFI=.89, GFI=.88 , AGFI=.86 であり、妥当なモデルとの結果を得た。



\*結果として重要な部分を太線で示す。  
 \*図の煩雑さを避けるため、誤差変数の表示は省略している。

図3 1歳6か月時における父の親性と母の育児負担感との関連（標準化係数）

#### 4) 考察

1歳6か月時において、母の育児負担感が緩和されるには、直接父の親性が高まることと、母が父からのサポート認知をすることが関連していたことから、父の親性が高まれば、母は、「父が役割を果たしてよくやってくれる、子どもへ愛情をもって自分と一緒に子育てしている」というように、父が育児に協力的・受容的であると捉えやすいと考えられる。父が親役割を肯定的に受け容れることで親になる意識が強まり、育児への関心は促され<sup>42)</sup>、父親の「受容的育児感情」が高まることで母の「育児への負担感」が軽減する傾向があること<sup>8)</sup>からも支持されたと言えよう。

また、育児負担感を“ストレス”としたとき、R.S.Lazarusら<sup>59)</sup>のストレス認知理論を応用するならば、母はストレッサーである育児負担感への対処行動とし

て、母が父を肯定的に評価（認知）する可能性が示唆される。母が父を肯定的に捉えた認知をすることができれば、母には肯定的な感情・情動変化が生じ、育児負担感を緩和すると考えられる。

つまり、父の親性の高まりは、母が父を肯定的に評価しやすくなり、親性の高まった父だからこそ母は父からのサポートを認知できると考えられる。よって、父の親性が母のサポート認知に影響を及ぼし、母のサポート認知が母の育児負担感の緩和に影響を及ぼすという結果も妥当であろう。

## 5) 結論

1歳6か月時の母の育児負担感の緩和には、直接父の親性が高まることと、父の親性が高まり、母がサポート認知をすることが重要であることが明らかになった。

1歳6か月時における父の親性が明らかになったことと、母の育児負担感への関連が明らかになったところで、父はどのように父らしくなるのか、父の親性がどのように高められていくのか、もう少し父について詳しく見ていく必要があると考え、次章では、父が父らしくなる要因の検討を行う。

## 第 2 章

### 3 歳 6 か月までに父が親になることの内面（意識）と行動の変化（研究Ⅱ）

#### 第 1 節 研究目的

育児期の父が育児をとおしてどのように“父らしく”“なるのか、父自身の内面（意識）と行動から明らかにすることを目的とする。

#### 第 2 節 研究方法

##### 1) 対象者

K 市の市民で、2008 年 7～8 月に 3 歳児健康診査対象児を持ち、1 歳 6 か月時点で 2 年後の質問紙調査協力が得られた父母のうち、面接によるインタビューへの同意が得られた 11 組のうち、父を対象とした。

##### 2) 調査方法

インタビューガイドを作成し、主聴取者とサブ聴取者の 2 人 1 組で調査対象者に聞き取りの内容確認を行いながら“父らしくなったと感じたところ”についてインタビューを行い、データ収集を行った。

対象者 1 人につき、40 分～50 分のインタビューとし、追加インタビューは行わなかった。インタビュー内容は、対象者の了解を得て IC レコーダーに録音し、逐語録を作成した。

##### 3) 分析方法

本研究は、帰納的アプローチによる質的記述的研究方法であり、質的帰納的に分析を行った。父自身が“父らしくなったと感じたところ”と関連する箇所を特定して抽出し、抽出した各データを解釈しながら、一般的コーディングを行った。

そして、どのように“父らしく”なってきたかと言うところの内面（意識）と

行動に関するカテゴリ（概念）を作成し、それらを用いて父が“父らしく”なっていることの構造化を試みた。

これらの分析過程においては、保健師資格を有し、地域看護領域における専門家（研究者）間で繰り返し検討して分析の信頼性・妥当性の確保に努めた。

#### 4) 倫理的配慮

調査対象者へは、本研究の目的・方法及び調査協力の辞退によって不利益が生じないこと、インタビュー内容はデータ化し、研究目的以外には使用せず、研究者のみが厳重に管理すること、逐語録は個人が特定されないよう ID で表記し、公表は匿名性確保すること、インタビュー協力以降でも、辞退が可能であることを書面と口頭で説明し、同意を得た後にインタビューを開始した。

なお、調査に先立ち、岡山県立大学倫理委員会の承認を得た。

### 第3節 研究結果

#### 1) 対象者属性

対象者の属性を表4に示す。調査対象者11名、平均年齢36歳であった。子どもの数は2人が7名（63.6%）、3人が4名（36.4%）。職業は、製造業が最も多く4名（36.4%）であった。

表4 対象者の属性

ID	父年齢	母年齢	子ども数	父職業	母の職業の有無
	平均36歳	平均34.4歳	2人(63.6%) 3人(36.4%)	製造業(36.4%)	有(54.5%) 無(45.5%)
1	34	35	2	卸売・小売	無
2	33	32	2	製造業	有(パート)
3	37	26	2	製造業	有(パート)
4	37	36	3	卸売・小売	無
5	41	38	2	公務員	無
6	39	36	2	製造業	有(常勤)
7	37	37	2	サービス業	有(常勤)
8	34	35	3	情報通信業	有(常勤)
9	31	30	2	建設業	無
10	40	40	3	製造業	無
11	33	33	3	サービス業	有(常勤)

## 2) 内容分析結果

35の2次コード、9つのサブカテゴリが抽出でき、4つのカテゴリ及び2つの中心的概念が生成された(表5)。それらカテゴリ及び中心的概念の関係性を検討した上で結果図を作成した(図4)。文中及び表中の2次コードは< >, サブカテゴリは「 」, カテゴリは『 』, 中心的概念を【 】で示した。

### (1) 『父の中で葛藤する』

#### ① 「母とのやり方の違い」

家事・育児では、父がやろうとする手技が、必ずしも母と一致しないため、父は<母のやり方を尊重する>ことで物事をうまく進めようとしていた。<母と違うやり方だが家事もする>一方で、<母のやり方を尊重>するあまり、手が出せず、育児・家事の主を母に渡している面もあり、<自由なやり方ならもっと家事・育児に力を発揮できる>と感じていた。

#### ② 「仕事か育児か優先順位への迷い」

子どもができてから、<子どもが優先と切り替える>ことや、<家族を優先に考える>という家族内役割の認識を持つが、<できる時は母を手伝うが、仕事を優先する>とも考えており、「仕事か育児か優先順位への迷い」を感じている。

### (2) 『バランスをとる』

#### ① 「父の家事・育児に対する考え」

父は、<自分ができる範囲でやる>という認識をもち、<できることはするが、できないことは手をださない>という割り切る面もあった。<主は母にとって欲しいが育児は手伝う>という本音の中、<一緒に育児をする感覚をもつ>ように意識し、<家事は平等でいい>と考えていた。また、<母から言われたことは逆らわずやる>と、母に依存的・従順的な面を持つ一方、<母が(子どもに)厳しいとき、父は柔らかく>という父独自の考えを持つ

表 5 内容分析結果

2次コード	サブカテゴリ	カテゴリ	中心的概念	
<母のやり方を尊重する> <母と違うやり方だが家事もする> <育児家事を父の自由なやり方ならもっと発揮できる>	「母とのやり方の違い」	『父の中で葛藤する』	【父が折り合いをつける】	
<子どもが優先と切り替える> <家族を優先に考える> <できる時は手伝うが、仕事を優先する>	「仕事か育児か優先順位への迷い」			
<自分ができる範囲でやる> <できることはするができないことは手を出さない> <主は母にとって欲しいが育児は手伝う> <一緒に育児をする感覚を持つ> <家事は平等でいいと思う> <母から言われたことを逆らわずやる> <母が厳しいときは、父は柔らかく接する>	「父の家事・育児に対する考え」	『バランスをとる』		
<母の大変さの訴えを受けとめる> <母の大変さの思いを測る、くみ取る> <母の育児ストレスの高い状況を客観的にみる> <面倒と感じながらも8割程度で聞く> <コミュニケーションの必要性を感じる> <お互いに思う普通が違うので歩み寄る>	「母に対してとる配慮」			
<遊びに行かなくなった> <今までは自分の遊びだけを考えていた>	「父自身で抑制」			
<家族が増え、仲間意識をもつ> <家族のリーダー、まとめ役、方向づけをする>	「父としての家族への責任」	『父として役割を遂行する』		【父として自覚する】
<父として求められた時、役割が果たせる> <父として子どもを叱る> <父にしかできない遊びや関わりをもつ>	「父としての子どもとの関わり」			
<子どもを目の前にする> <子どもの世話をしないといけないと感じる> <子どもから頼られていると感じる> <子どもと接することで満足感がある> <母との差別化や役割期待を子どもから受ける> <子どもが成長し、いろいろできるようになる、反応があって実感する>	「子どもの直接的反応への感情」			
<親だからこそわかるタイミング、インスピレーションがある> <子どもや母からパパと呼ばれて実感する> <子どもの先々への心配をする>	「子どもがいることで経験する慈しみ」	『父として実感する』		

など、「父の家事・育児に対する考え」についてバランスをとりながら進めていた。

## ②「母に対してとる配慮」

父は、＜母の大変さの訴えを受け止める＞ことや＜母の大変さの思いを測る、くみ取る＞ことを自分のできる範囲で行い、＜母の育児ストレスの高い状態を客観的にみる＞ようにしていた。父は母の大変さについては理解したほうがいいという認識があるため、母の話を＜面倒と感じながらも 8割程度で聞く＞という行動で夫婦間のバランスをとろうとする一面もあった。そのために＜父母がそれぞれ思う普通が違うということにも歩み寄る＞こと、＜母とのコミュニケーションの必要性＞を重視し、育児期が円満に過ごせるよう、父は「母に対してとる配慮」でバランスをとるようにしていた。

## ③「父自身で抑制」

子どもができる前までは＜自分の遊びだけを考えていた＞時代から、子どもや家族の優先順位を高くし、独身時代のように一人で＜遊びに行かない＞といった行動とし、自分のことだけ考えず家族のことを考えられるよう「父自身で抑制」できるようになっていた。

# (3) 『父として役割を遂行する』

## ①「父としての家族への責任」

父は＜家族が増え仲間意識を持つ＞中で、＜家族のリーダー・まとめ役、方向づけをする＞など、家族という一つの集団に属する自分を意識し、その中で、「父としての家族への責任」を父自身の果たすべき役割であると認識していた。

## ②「父としての子どもとの関わり」

父は、＜父にしかできない遊びや関わりをもつ＞こと、＜父として子どもを叱る＞といった子どもが成長することで生じる「父としての子どもとの関わり」について“父として”を認知していた。

#### (4) 『父として実感する』

##### ① 「子どもの直接的反応への感情」

父は、＜子どもを目の前にする＞ので、＜子どもの世話をしなければなら  
ないと感じる＞。育児の過程で＜子どもが成長し、いろいろできるようにな  
る、反応があって実感する＞体験で多くの「子どもの直接的反応への感情」  
があった。

##### ② 「子どもがいることで経験する慈しみ」

父は、＜子どもや母からパパと呼ばれて実感する＞ことや＜子どもの先々  
への心配をする＞といった「子どもがいることで経験する慈しみ」を抱いて  
いた。

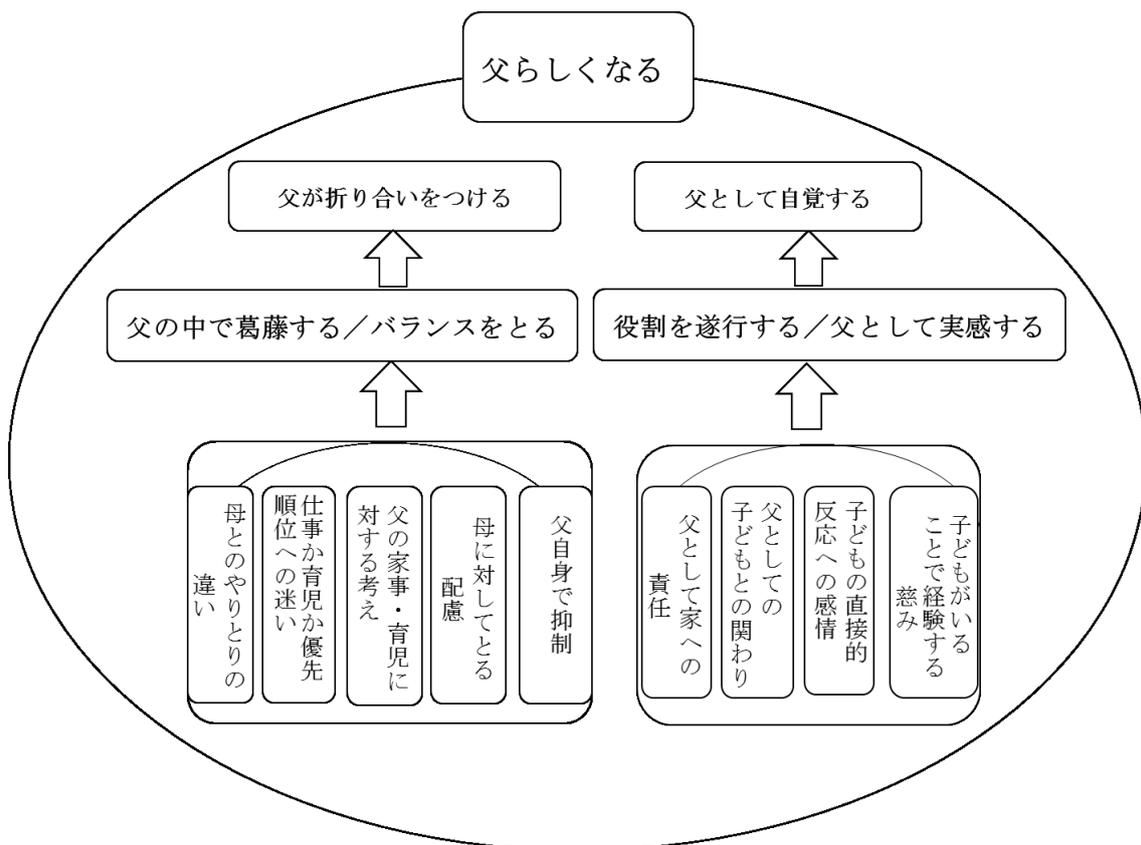


図4 父らしくなる折り合いと自覚

## 第4節 考察

本研究の目的は、育児期の父自身の内面(意識)と行動からみて、“父らしく”なったのかを明らかにすることであった。

対象者は、3歳6か月時の子どもの数も2人～3人であり、母の仕事の有無に偏りなく、一般的な対象と言えた。

本研究の結果からは、「母とのやり方の違い」、「仕事か育児か優先順位への迷い」、「父の家事・育児に対する考え」、「母に対してとる配慮」「父自身で抑制」「父としての家族への責任」「父としての子どもへの関わり」「子どもの直接的反応への感情」「子どもがいることで経験する慈しみ」の9つのサブカテゴリ、『父の中で葛藤する』『バランスをとる』『父として役割を遂行する』『父として実感する』4つのカテゴリ、【父が折り合いをつける】【父として自覚する】の2つの中心的概念が抽出された。

及川は、親性の獲得過程における変化として、「自己の内面の変化(心理面)」「自分の内面の変化(成長)」「生活面の変化」「役割意識」「パートナーとの関係」「家族のつながり」「社会」という7つのカテゴリを抽出している<sup>40)</sup>。「自己の内面の変化(心理面)」「自分の内面の変化(成長)」「役割意識」「パートナーとの関係」「家族のつながり」については、本研究においても、2次コード及びサブカテゴリにおいて同様の結果が得られている。

及川が示した仕事への意欲や自分の健康、経済面のことをあわせて「生活面の変化」と示したカテゴリと、友人が増えて違う社会との接点が増えたりするネットワークや子どものために良い社会を築きたいなどから得た「社会」で示したカテゴリは、本研究では「仕事か育児か優先順位への迷い」や「父自身で抑制」することが「生活面の変化」を、「子どもがいることで経験する慈しみ」が「社会」のより具体的な内容を示したものと考えられた。

次に抽出された2つの中心的概念の【父が折り合いをつける】と【父として自覚する】が、父らしくなることにどのように関連するのかについて検討する。

## 1) 父がつけている折り合い

伝統的に男性に与えられた役割が就労などの家庭外の役割であったため、家庭内の役割を積極的に果たすためには、意識改革が必要であると指摘されていたが<sup>35)</sup>、最近の父は、子どもが生まれてからの生活において、家事にしても育児にしても自ら手を出すことについては躊躇をしていない。しかしながら、その手の出し方は、「母とのやり方の違い」を認識していることにより、葛藤を生じていることが推察できる。

また、父が育児参加するにあたって、従来から仕事と育児のバランスについては指摘されており<sup>51)60)</sup>、本研究においても、「仕事か育児か優先順位への迷い」があった。このように『父の中で葛藤する』際には、父自身と母と子どもの3者の状況から判断して最終的にどれかを選ぶ、あるいは決定するために納得が得られるところを見つけて折り合いをつけていると考えられた。

父に着目した先行研究では、父がどのような家事・育児行動を行っているのか<sup>36)</sup>、父の育児が子ども・母・夫婦関係にどう影響するかといった内容<sup>7)61)</sup>と、“葛藤”として示されたのは、仕事と家庭あるいは育児、つまり仕事役割か家庭役割かという内容である<sup>51)62)63)</sup>。育児期に良好な夫婦関係のもと、家事・育児など日常生活を送っていくために必要であり、かつ出産後から子どもの成長、父自身の経験と成長を併せて“父らしく”なっていくためには、“葛藤”しているだけではない。父の内面（意識）や行動において大なり小なり折り合いをつけられるからこそ父らしさを備えてくると考えられ、今回は具体的な内容が得られたと言えよう。

また、子どもがいることや家族が増えたことで、＜今までは自分の遊びだけを考えていた＞父が＜遊びに行かなくなった＞という行動をとっている。これらは一見マイナス面と捉えられるが、父の自由の制限や喪失感は、親になることによる発達の一つの側面であるとされている<sup>44)60)</sup>ことから、遊びを制限することは

「父自身で抑制」できるように父が人間的かつ父として成長し、行動の『バランスをとる』ことができていると考察された。

## 2) 父として自覚すること

先行研究では、父になることに対する気持ちや意識の変化として、立ち合い出産経験のあることや、切迫早産や早産児出生などで必然的に関わらざるを得ない状況が父としての意識に影響を及ぼし、父としての自覚が促される契機となっているとされている<sup>64~66)</sup>。しかし、この場合は、危機的状況を乗り越えての子どもとの対面であり、“身の引き締まる思い”に近い、漠然とした自覚であると推察される。本研究で明らかになっている自覚は、子どもの出生に関して大きなインパクトがなくても、その後の育児期において、「父としての家族への責任」や「父としての子どもとの関わり」、「子どもの直接的反応への感情」や「子どもがいることで経験する慈しみ」など、父の内面（意識）と行動として具体的な内容で示されたと考える。

子どもがいる毎日の生活の中で、子どもの成長を通じて『父として役割を遂行する』ことや、『父として実感する』ことで、【父として自覚する】ことができると考える。

## 3) 父らしくなる折り合いと自覚

父は、子どもが生まれてから3歳6か月になるまでに、子どもの成長と共に、子どもの反応があることや、子どもと母を通じて家事・育児などの多くの経験をしている。子ども・母、父自身の3者が置かれた状況の中で父自身の行動として、父が役割を担うことに適応してきているとも考えられる。

そのように適応するために父自身の内面(意識)を臨機応変に【父が折り合いをつける】ことができるということは、父自身も成長し、父らしくなっている<sup>7)</sup>と推察された。一方で『父として役割を遂行する』ことや、『父として実感

する』ことの経験が日々積み重なることによって、他の誰でもない、家族の中で自分が父であることを【父として自覚する】ようになると考えた。

以上のことから、父の内面（意識）と行動において自分の中で葛藤し、バランスをとりながら【父が折り合いをつける】ことと、日々子どもがいる生活の中で、父としての役割を遂行しながら父として実感する場面をいくつも経験し、【父として自覚する】ことで、子どもが生まれてから3歳6か月までの育児期に“父らしくなる”ことが明らかになった。

3歳6か月時までに父が父らしくなる要因が明らかになったところで、父の親性が増えることを踏まえ、次章では3歳6か月時における父の親性と母の育児負担感との関連について検討を行う。

## 第3章

### 3歳6月時における父の親性と母の育児負担感との関連（研究Ⅲ）

#### 第1節 研究目的

研究1の結果を踏まえ、3歳6か月時における父の親性を明らかにし、父の親性が母の育児サポート認知を介して、育児負担感に影響を及ぼすのかを明らかにする。

#### 第2節 研究Ⅲ-1 3歳6か月時の父の親性の検討

##### 1) 研究方法

###### (1) 調査対象

調査期間中（2008年7～8月）K市の3歳児健康診査の対象児を持つ父母のうち、1歳6か月児健康診査時で2年後の調査協力が可能と回答した293件を対象とした。

###### (2) 調査方法

1歳6か月時で行ったものと同じ無記名自記式調査票を郵送し、同封した返信用封筒で回収をした。

###### (3) 調査内容

1歳6か月時の内容と同様に、対象者の属性（年齢、子どもの数、職業等）、父の親性検討項目とした。父の親性尺度は、及川の親性発達尺度<sup>52)</sup>（6因子40項目）、岩田の父親役割への適応におけるストレス測定尺度<sup>53)</sup>（5因子27項目）、父が親になることの内面（意識）と行動の変化（研究Ⅱ）の3つを参考に23項目を選定した。

「全くそう思わない；0点」から「非常にそう思う；3点」の4件法で、得点が高いほど、親性が高いとした。

#### (4) 分析方法

父の親性検討項目 23 項目は、欠損値があるなどの項目を除外し、主因子法にて因子抽出の後、確認的因子分析を行った。

分析ソフトは、SPSS21.0forWindows 及び Amos21.0 を用いた。

#### (5) 倫理的配慮

調査は無記名自記式とした。回答はあくまでも対象者の意思決定を尊重し、拒否する権利を有し、拒否した場合の不利益は被らないこと、守秘義務を遵守すること、目的外使用はしないことを明記し、厳封した返信による回答をもって承諾とした。なお、調査に先立ち、岡山県立大学倫理委員会の承認を得た。

## 2) 研究結果

### (1) 対象者

対象の父母 293 件に調査票配布した後 102 件の返送があった(回収率 34.8%)。欠損値のあるものを除いた有効回答 92 件を分析対象とした(有効回答率 31.4%)。対象者の属性は、表 6 に示した。

父の年齢は平均 35.4 歳 (SD±3.3)、母の年齢は平均 33.9 歳 (SD±3.6) であった。子どもの出生順位は、第 1 子が 46.7%、第 2 子が 43.5%で、子どもの数は、1 人が 17.4%、2 人が 63.0%、であった。

父の職業は、製造業が最も多く 32.6%であり、母の仕事従事状況は、専業主婦が 44.6%で、何らかの仕事を持つ者が 55.4%であった。

表6 3歳6か月時 対象者の属性 (n=92)

		人	%
父の年齢 平均値35.4(±3.8)	20～25歳	1	1.1
	26～30歳	3	3.3
	31～35歳	43	46.7
	36～40歳	37	40.2
	41～45歳	7	7.6
	46～50歳	1	1.1
母の年齢 平均値33.9(±3.6)	20～25歳	1	1.1
	26～30歳	15	16.3
	31～35歳	44	47.8
	36～40歳	30	32.6
	41～45歳	1	1.1
	46～50歳	1	1.1
父職業	鉱業	1	1.1
	建設業	13	14.1
	製造業	30	32.6
	運輸業	9	9.8
	卸売・小売	6	6.5
	飲食・宿泊	3	3.3
	医療・福祉	4	4.3
	教職	2	2.2
	公務員	6	6.5
	サービス業	10	10.9
	情報通信	3	3.3
	その他	5	5.4
母の仕事	専業主婦	41	44.6
	パート・アルバイト	19	20.7
	内職	2	2.2
	自営業	4	4.3
	常勤	26	28.3
出生順位	第1子	43	46.7
	第2子	40	43.5
	第3子	6	6.5
	第4子	3	3.3
子どもの数	1人	16	17.4
	2人	58	63
	3人	15	16.3
	4人	3	3.3

(2) 3歳6か月時の父の親性因子抽出

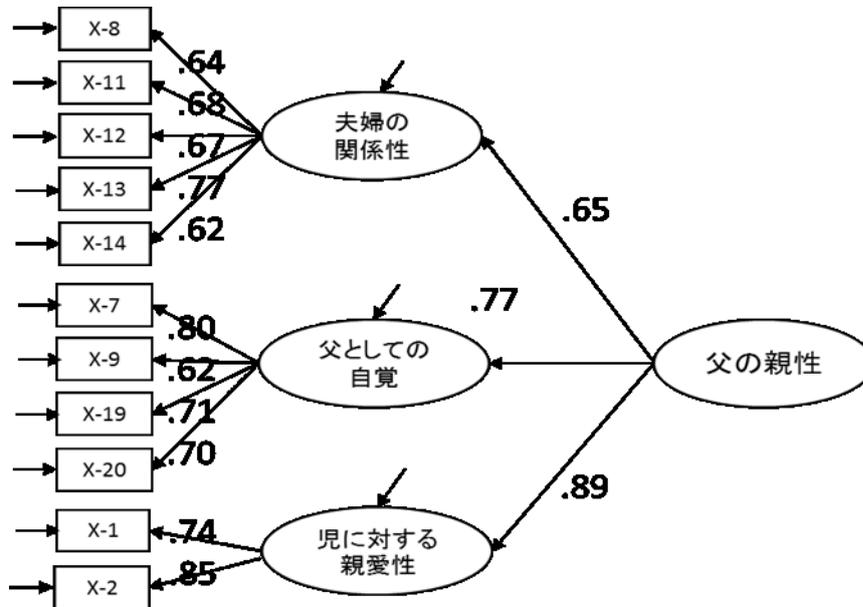
父の親性検討項目 23 項目を主因子法 (Promax 回転) で 5 因子を抽出し、「説明された分散の合計」及び初期解におけるスクリープロットと固有値を見て、3 因子が想定できた。3 因子の説明率 50.02%。負荷量が低値 (0.35 以下) であるなど、不適切な 12 項目を除外し、残った 11 項目から 3 因子を抽出した結果を表 7 に示す。第 1 因子を【夫婦の関係性 (5 項目)】、第 2 因子を【父としての自覚 (4 項目)】、第 3 因子を【児への親愛性 (2 項目)】と命名した。

表 7 3歳6か月時父の親性因子(3因子11項目)

項 目	第1 因子	第2 因子	第3 因子
<u>第1因子「夫婦の関係性」 Cronbach's <math>\alpha</math> = 0.81</u>			
X13 子どもが生まれてから夫婦間にもめ事の機会が増えた	.754	-.129	.018
X11 妻が私に何を期待しているのか分からず、イライラすることがある	.748	-.095	-.022
X14 妻の悩みを聞くのは負担である	.708	.105	.029
X12 育児についての妻からの期待は私には負担である	.619	.113	-.106
X 8 夫婦間でのコミュニケーションは取れていると思う	.431	.111	.224
<u>第2因子「父としての自覚」 Cronbach's <math>\alpha</math> = 0.80</u>			
X19 父親としての責任を感じる	-.127	.792	-.002
X 9 子どもが生まれて妻の成長を感じる	.075	.780	-.209
X20 子どものよき父親になりたいと思う	.077	.594	.100
X 7 子どもが生まれて家族を大切にしたいという気持ちが高まった	-.036	.575	.310
<u>第3因子「児への親愛性」 Cronbach's <math>\alpha</math> = 0.77</u>			
X 1 私は子どもへの愛情が深いと思う	.005	-.102	.823
X 2 私は父親であることを楽しんでいる	-.015	.037	.797
<u>親性検討項目23項目から削除した項目</u>			
X 3 子どもの成長が楽しみである			
X 4 私は子どもの生活リズムに合わせていると思う			
X 5 私は自分を犠牲にしていると思う			
X 6 子どもが生まれて友人と過ごす時間が少なくなり、さびしい			
X10 子どもが生まれてから私は人間的に成長したと思う			
X15 子どもが生まれてからいろいろとやるが増えたので疲れ気味である			
X16 家事の手伝いは負担である			
X17 仕事への意欲が高まった			
X18 子どもが生まれてから私は忍耐強くなったと思う			
X21 子どもが生まれてから何か思い通りにいかずにイライラする			
X22 イライラするとつい子どもにあたってしまふ			
X23 子どもが泣いていても、何を求めているかわからず困る			

次に3因子の妥当性については、内的整合を示すCronbachの $\alpha$ 信頼係数が、第1因子（夫婦の関係性）0.81、第2因子（父としての自覚）0.80、第3因子（児への親愛性）0.77であり、内的整合性に問題がない尺度と判断し、確認的因子分析を行った結果を図5に示す。

このモデルの説明力の程度を示す適合度指標RMSEA=.059, CFI=.96, GFI=.91, AGFI=.85であり、妥当なモデルであるとの結果を得た。



RMSEA=.059 CFI=.96, GFI=.91, AGFI=.85

\* 図の煩雑さを避けるため、誤差変数の表示は省略している。

図5 3歳6か月時における父の親性因子（確認的因子分析，標準化係数）

### 3) 考察

#### (1) 3歳6か月時における父の親性因子について

3歳6か月児をもつ父の親性を測る尺度として、【夫婦の関係性】【父の自覚】【児への親愛性】という3つの因子が抽出できた。

第1因子の【夫婦の関係性】について、父の積極的な育児参加により夫婦関係の質を向上させると言われている<sup>35)</sup>。しかし、現実の子育て期には、男性としても社会における役割も増大する時期にあり、実際の育児行動量は意気込みに比べて低下し<sup>35)</sup>、積極的な育児参加に至っていない。つまり、父は育児参加したいと思っても、家庭外の役割重視により家庭内役割を犠牲にすることもやむを得ず<sup>62)</sup>、母は育児負担が自分だけにかかることへのストレスや、父に対する不満を感じてしまい、良好な夫婦関係は望めないおそれがある。育児に関する否定的な感情が蓄積される前に、夫婦双方がお互いの役割分担の領域についてよく話し合い、合意することが必要であり、夫婦間のコンセンサスづくりが重要となる<sup>35)</sup>。

夫婦関係を良好に保つことは、父自身の精神的負担や家事・育児の負担感を軽減し<sup>69)</sup>、夫婦関係の満足度が高ければ父の発達にも関係するとされており<sup>34)</sup>、本研究結果でも父の親性の下位概念として【夫婦の関係性】が示されたことは、先行研究とも同様の結果であり、夫婦の良好な関係性は父を育て、親性を高めることに関連していると考えられた。

次に第2因子の【父としての自覚】については、父親の家事・育児等への具体的な関わりが自身の成長発達と大きく関係しているため<sup>17)</sup>、育児の経験によって父として世話役割や稼ぎ手役割を担うことを受け入れることと関係する。父として家族のことを思うようになるものの、社会的役割も担わざるを得ない中、思うように育児参加ができない葛藤を経験しながら、何らかの犠牲や我慢を伴い、父に人間的な成長の認識と、親としての自覚をもたらすと考えられる。これは、大橋ら<sup>41)</sup>の研究結果と同様で、親性の因子として【父としての自覚】

は妥当であると考えられる。

第 3 因子の【児への親愛性】については次のように考える。父の育児経験は子どもへの慈しみという養護性を育てると言われており<sup>70)</sup>、児と接する時間が長いほど、その中で児から何らかの反応が返ってくる過程を繰り返し、父自身が関わり方への満足感や充実感を得ることで児への愛情が深まり<sup>71)</sup>、親意識を高める<sup>52)</sup>。育児の過程で児への親愛性を示す父を、母は共に育児をしていると肯定的に評価でき、一層夫婦間の信頼関係も高まると考えられ、これも先行研究の父としての自覚と児への愛着は相互に関連しているという結果<sup>45)</sup>を支持したと言える。

以上のように、【夫婦の関係性】や【父としての自覚】、【児への親愛性】が相互に関連し、父の親性得点は高くなると考えられ、これら 3 つの因子は、父の親性として妥当であると考えられる。

#### 4) 結論

3 歳 6 か月時における父の親性は、【夫婦の関係性 (5 項目)】【父としての自覚 (4 項目)】【児への親愛性 (2 項目)】の 3 因子 11 項目であることが明らかになった。

### 第3節 研究Ⅲ-2 3歳6か月時の父の親性と母の育児負担感との関連

#### 1) 調査内容

調査内容は、①対象者の属性（年齢、子どもの数、職業等）、②3歳6か月時の父の親性（3因子12項目；研究Ⅲ-1）、③母の育児負担感（中嶋他の「母の育児負担感尺度」<sup>54)</sup>）、父の育児サポートに関する母の認知（中嶋他の「父の育児サポートに関する母親の認知尺度」<sup>55)</sup>）とした。

父の親性尺度は、研究Ⅲ-1で明らかにした【夫婦の関係性（5項目）】【父としての自覚（4項目）】【児への親愛性（2項目）】の3因子で、「全くそう思わない；0点」から「非常にそう思う；3点」の4件法とし、得点が高いほど父の親性が高いものとした。

「母の育児負担感尺度」は、中嶋ら<sup>54)</sup>の尺度を用いた。母親の児に対するネガティブな感情（否定的感情認知4項目）と育児に伴う母親自身の社会的活動の制限に関連した内容（社会的活動制限の認知4項目）が測定できる。信頼性・妥当性が確認されている。「全くない；0点」から「いつもある；4点」の5件法で、得点が高いほど、母の育児負担感が高いことを示す。

「父の育児サポートに関する母親の認知尺度」は、中嶋ら<sup>55)</sup>の尺度を用いた。父の精神的サポート（4項目）、手技的サポート（4項目）、情報提供的サポート（2項目）に対しての母の認知を、「とても期待できる；2点」から「期待できない；0点」の3件法で、得点が高いほど育児サポート認知が成されていることを示す。信頼性・妥当性が確認されている。

#### 2) 分析方法

父の親性と、母の育児サポート認知及び母の育児負担感との関連について、共分散構造分析のパス解析を行い検討した。

分析ソフトは、SPSS21.0forWindows 及び Amos21.0 を用いた。

倫理的配慮は、調査は無記名自記式調査とし、回答は対象者の意思決定を尊重、拒否する権利を有し、拒否した場合も不利益は被らないこと、守秘義務を遵守、目的外使用はしないことを明記し、厳封した返信による回答をもって承諾とした。なお、調査に先立ち、岡山県立大学倫理委員会の承認を得た。

### 3) 結果

#### (1) 対象者

対象の父母 293 件に調査票配布した後 102 件の返送があった(回収率 34.8%)。欠損値のあるものを除いた有効回答 92 件を分析対象とした(有効回答率 31.4%)。基本属性は、研究Ⅲ-1 表 6 のとおりである。

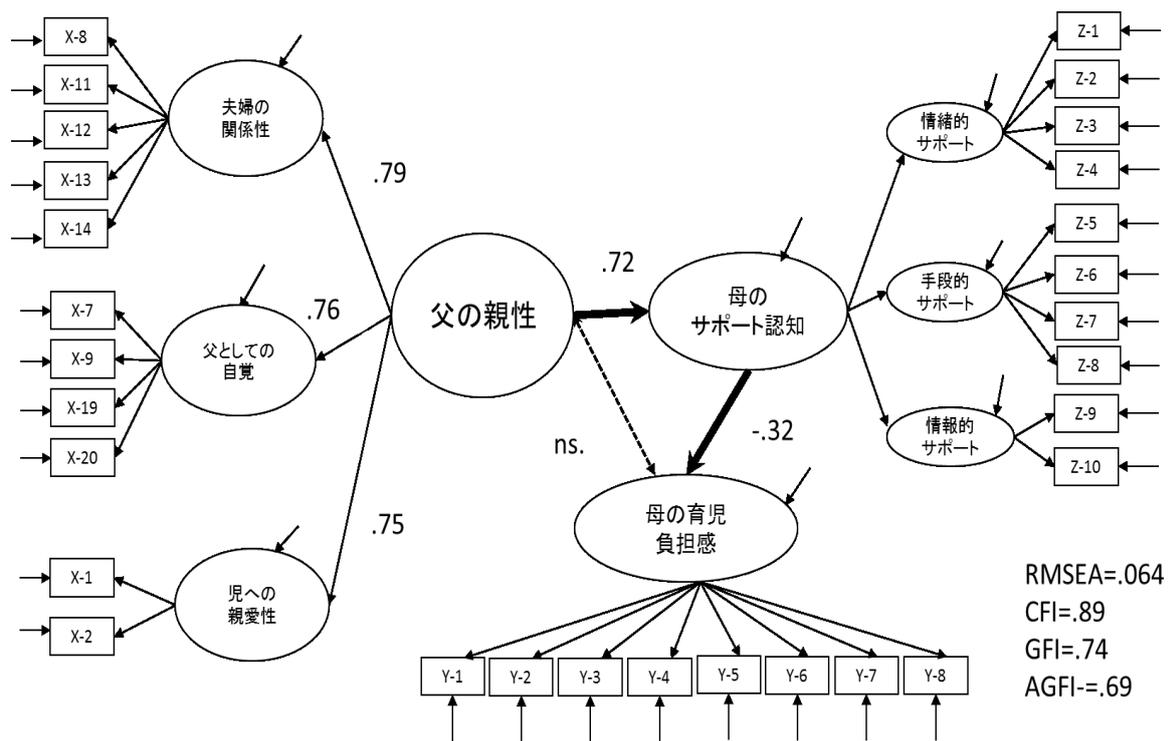
#### (2) 3 歳 6 か月時の父の親性と母のサポート認知、母の育児負担感との関連

共分散構造分析で検討した結果を図 6 に示した。

「夫婦の関係性」「父としての自覚」「児への親愛性」の 3 因子からなる父の親性の得点が高まるほど、母が育児サポート認知をすることができ、母の育児負担感は軽減されるという結果を得た。

パス係数に着目すると、父の親性から母の育児サポート認知に向かうパス係数は 0.75、母の育児サポート認知から母の育児負担感に向かうパス係数は -0.34 で統計学的に有意な水準にあった。1 歳 6 か月時には、父の親性から直接母の育児負担感に向かうパスも有意であったが、3 歳 6 か月時では非有意という結果であった。

このモデルのデータに対する適合度は、RMSEA=.064, CFI=.89, GFI=.74, AGFI=.69 であり、概ね妥当なモデルであるとの結果を得た。



RMSEA=.064, CFI=.89, GFI=.74, AGFI=.69

\*結果として重要なパスを太線で示した。

\*図の煩雑さを避けるため、誤差変数の表示は省略している。

図6 3歳6か月時における父の親性と母の育児負担感の関係（標準化係数）

#### 第4節 考察

3歳6か月児をもつ父母92件を対象とし、母の育児負担感の緩和に、父の親性が母の育児サポート認知を介して影響を及ぼすことを推定したモデルの検証を行った結果、育児期の父の親性が、「夫婦の関係性」「父としての自覚」「児への親愛性」の3因子からなること、そして父の親性は、母の育児サポート認知を介して母の育児負担感に影響を及ぼすことが明らかになった。

父親の平均年齢は、35.4歳、職業を製造業とする者が多く、母の平均年齢は33.9歳で専業主婦が約4割、有職者が約5割であり、これはK市全体と比較しても同様の結果を示していた<sup>67)</sup>。母の年齢及び出生順位の傾向は、全国調査と比較してもほぼ同様であった<sup>68)</sup>。また、母の育児サポート認知及び育児負担感は、その尺度を使用した先行研究<sup>54)55)</sup>と比較しても平均値が0.5~0.8程度の差であることから、同様の結果が得られたと判断でき、比較的育児サポート認知が高く、育児負担感の低い対象であった(表8)。この理由として、本研究は1歳6か月児時で、父母を対象とした2年後(3歳6か月児時)の調査承諾が得られた父を対象としたので、育児への関心が高く、夫婦間のコミュニケーションも良好であるからではないかと考えられる。

1歳6か月時では、父の親性が高まることにより、直接母の育児負担感は緩和されることと、母が父からの育児サポートを認知することも緩和につながることを示唆された。これに対し、3歳6か月時では、父の親性が高まっただけでは、母の育児負担感は緩和されず、母が父からの育児サポート認知を介することによって緩和されることが明らかになった。加えて3歳6か月の親性因子では、1歳6か月時にはなかった「夫婦の関係性」が見られ、「役割遂行への適応感」や「役割期待への受容」は見られなかった。これらのことは、1歳6か月時から3歳6か月時までには子どもの成長・発達が著しく、母には新たな育児負担感が増強し<sup>2)73)74)</sup>、母の父への要求内容が変化しているからだと考えられる。すなわち直接的な育児行動だけでなく、母が人間として尊重されることと夫婦の相互関係の深まりが精神的支えになる

75)と推測される。したがって、母が父を肯定的に認知することが、母の育児負担感の緩和に関連している<sup>21)72)</sup>ことを踏まえると、夫婦間の関係性が良好であること<sup>35)37)</sup>に加えて、本研究で明らかにした父としての自覚や父の児への愛情が深いという父の親性が高まることで母は精神的にも支えられていると感じ、サポートを受けているという肯定的な認知につながるということが重要であると考えられる。

本研究で、母の育児負担感の緩和に、父の親性が母の育児サポート認知を介して影響を及ぼすことを推定したモデルが確認できたことから、母の育児負担感の緩和には父の親性の高まりに加えて母の育児サポート認知が重要であることを示すことができた意義は大きい。

表 8 父の親性，母の育児サポート認知，母の育児負担感の平均

		得点範囲	平均	標準偏差
父	父の親性	0-33	23.6	7.6
母	母の育児サポート認知	0-20	11.4	6.9
	母の育児負担感	0-32	9.9	8.1

### Ⅲ 結論

本研究では、幼児健康診査の実施場面等で行う父母への育児支援の向上に資することをねらいとし、1歳6か月時と3歳6か月時の父の親性を明らかにすること、そしてその父の親性が、母の育児負担感の緩和にどのように関連しているのかを明らかにすることを目的とした。

前記の目的を達成するために、①1歳6か月時における父の親性と母の育児負担感との関連、また②子どもが生まれてから3歳6か月時までに父が親になることについてどのような内面（意識）と行動の変化があるのか、さらに③3歳6か月時における父の親性と母の育児負担感との関連を検討することを課題とした。

まず父の親性については、1歳6か月時は4因子16項目（「役割遂行への適応感」「役割期待への受容」「人間的成長・責任感」「児に対する親和性」）、3歳6か月時では3因子11項目（「夫婦の関係性」「父としての自覚」「児への親愛性」）の尺度を開発した。

次に父が“父らしくなる”には、育児の中で“折り合いをつける”“父として自覚する”という内面（意識）と行動の変化があることを見出した上で、父の親性が母のサポート認知を介して母の育児負担感に影響を及ぼすモデルの検証を行った。

結果、1歳6か月時は、父の親性が高まることが直接、母の育児負担感の緩和に影響していた。これに対して、3歳6か月時の母の育児負担感の緩和には、父の親性が高まり、母が育児サポートの認知を介さなければならず、サポート認知の重要性が示唆された。

#### （1）1歳6か月時と3歳6か月時における父の親性

育児経験の中で、父の内面（意識）と行動に変化があり、父が折り合いをつけることや父として自覚することによって父らしくなるため、父の親性が変化していることが明らかになった。したがって、幼児健診場面等では、1歳6か

月、3歳6か月時で親性に違いがあること意識し、父の親としての自覚を促す助言内容にする必要がある。

## (2) 父の親性と母の育児負担感との関連

1歳6か月時は、父の親性が高まることで直接と、父の親性が高まり、母が父からの育児サポートを認知することで母の育児負担感は緩和される。

一方、3歳6か月時は、父の親性が高まっただけでは、母の育児負担感は緩和されず、母が父からの育児サポート認知をすることによって緩和される。

1歳6か月時では、父も母もお互い親になる過程を同じように歩み始めるが、子どもを育てる中で、父よりも母は子どもと接する時間が長く、育児に関するイベント経験も積んでくることから、母の父への要求が変化してくると推察する。よって、3歳6か月時では父の親性が高まっただけでは育児負担感が緩和されず、母の認知に影響されると言えよう。

したがって、母の育児負担感の緩和には、子どものどの年代においても父の親性の高まりが必要であり、父の親性は、子どもの年代によって変化している。そして母の育児負担感の緩和に母のサポート認知を介することから、言い換えるならば、母がサポート認知できるように父の親性が高まる必要性があり、変化する父の親性の下位概念を理解することが重要であった。

このことから、健診場面等で母に対して、母が父を評価（母が父の家事・育児参加に対して肯定的に認知）してもらう内容について、気づきを促す等の支援が必要であり、父に対しては親性を自覚できるよう、学習の機会を設ける必要がある。

#### IV 実践への示唆

本研究で得られた知見は、幼児健康診査等において、成長・発達に課題のある児の早期発見だけでなく、父母への助言に有用な示唆であると考えられる。幼児健康診査では、主に母と対象児での受診になるため、母には、父の親性が育児を通して高まること、1歳6か月時と3歳6か月時では父の親性が異なること、母は父に何をどうしてほしいか（育児の何をしてほしいのか、家事の何をしてほしいのか等）を具体的かつ言葉で表現するなど、夫婦間のコミュニケーションを常日頃からとるよう心掛けるよう提案する。

また、母に対しては、父への要求を高めるだけでなく、父が行う育児・家事で肯定的に認められるところを見つけるよう促し、気づいてもらう必要がある。現在、妊娠期の夫婦を対象としたパパ・ママセミナーの開催は多いが、それらは主に出産準備、沐浴などの手技的指導と、漠然と育児参加を促す内容が大半を占める場合が多い。したがって、幼児をもつ父の親性をテーマにした教室（学習の機会）の必要性について提言できる。例えば、K市は製造業の父が多いという特徴があったので、企業と協働で教室（学習の機会）を短時間で開催し、父自身のワーク・ライフ・バランスを保つことと併せて父の親性を高める可能性が期待できる。そして学習内容として、母の育児負担感の緩和には、父の親性が関与していることや父自身が育児に関わることが自分の人間的成長を促すことを伝え、育児経験を積む中で折り合いをつけることも必要なことであると助言し、父としての自覚を促すよう育児や家族について振り返る機会を持つことが効果的ではないかと考える。

## V 研究の限界と課題

研究対象は K 市の代表性を示すが、育児負担感を強く感じている対象とは言えない。本研究では、父の人格的特性や個々の意識に着目した親性尺度とし、母の仕事の有無やソーシャルサポートの有無等の環境要因が含まれていないため、“父の親性”の構成因子は一部である。

また、親性の概念を様々に捉えることができる中、本研究の親性尺度については、今後、精選が必要であると考えられる。さらに、本研究で得られた育児期の父の親性や、父らしくなるための折り合いと自覚については、子どもの数等を考慮した分析ができていないので、今後の課題としたい。

## VI 引用・参考文献

- 1) 大原美知子.母親の虐待行動とリスクファクターの検討~首都圏在住で幼児をもつ母親への児童虐待調査から~.社会福祉学.43(2) ; 46-57.2003.
- 2) 佐藤幸子, 遠藤恵子, 佐藤志保.母子健康手帳交付時から3歳児健康診査時までの母親の不安, うつ傾向, 子どもへの愛着の経時的変化の検討.日本看護研究学会雑誌.35(2) ; 71-77.2012.
- 3) 子ども虐待による死亡事例等の検証結果等について(第9次報告資料編).2013.
- 4) 平成25年度版子ども・若者白書.内閣府.(2014年12月1日アクセス可能)  
[http://www8.cao.go.jp/youth/whitepaper/h25honpen/pdf\\_index.html](http://www8.cao.go.jp/youth/whitepaper/h25honpen/pdf_index.html)
- 5) 岡本絹子.乳幼児を持つ母親の疲労感と父親の育児参加に関する研究.小児保健研究. 61 ; 692-700.2002.
- 6) 中山美由紀, 三枝愛.1歳6か月児をもつ母親に対する父親の育児支援行動.母性衛生. 44 ; 512-520.2003.
- 7) 田中恵子.父親の育児家事行動・夫婦関係満足度の変化と母親の育児ストレスとの関連性.人間文化研究科年報.25 ; 215-224.2010.
- 8) 丸山彩香, 亀田幸枝, 島田啓子他.軽度の虐待傾向に関与する両親間における対児および育児感情の相互関係.子どもの虐待とネグレクト.7(2) ; 222-228.2005.
- 9) 男女共同参画基本計画, 内閣府, 2000.(2014年12月7日アクセス可能)  
[http://www.gender.go.jp/about\\_danjo/basic\\_plans/1st/index.html](http://www.gender.go.jp/about_danjo/basic_plans/1st/index.html)
- 10) 少子化対策プラスワン, 厚生労働省, 2002.(2014年12月7日アクセス可能)  
<http://www.mhlw.go.jp/houdou/2002/09/h0920-1.html>
- 11) 第4回全国家庭動向調査.国立社会保障・人口問題研究所.2008.
- 12) 宮木由貴子.日本の男性の子育てを考える.LIFE DESIGN REPORT.7 ; 1-6. 2014.
- 13) 桑名行雄, 桑名佳代子.1歳6か月児をもつ父親の育児ストレス~親役割認知及び性役割態度との関連~こころの健康.21 ; 42-54.2006.
- 14) 五十嵐久人, 飯島純夫.父親の育児参加への意識と育児行動,山梨医大紀要. 18 ;

89-93.2001.

- 15) 宮木由貴子.父親の子育てに関する一考察~30代・40代の父親の子育て状況と母親の意識~.LIFE DESIGN REPORT. 4 ; 28-35. 2014.
- 16) 中添和代, 舟越和代, 白石裕子.働く母の育児不安~夫の育児サポート意識との関連~.地域環境保健福祉研究. 6 ; 39-46.2003.
- 17) 尾形和男, 宮下一博.父親の協力的関わりと母親のストレス, 子どもの社会性発達および父親の成長.家族心理学研究. 13. ; 87-102.1999.
- 18) 田中美樹, 布施芳史, 高野政子.「父親になった」という父性の自覚に関する研究.母性衛生. 52(1) ; 71-77. 2011.
- 19) 尾形和男, 宮下一博.父親と家族~夫婦関係に基づく妻の精神的ストレス, 幼児の社会性の発達及び夫自身の成長発達~.千葉大学教育学部研究紀要, I 教育科学編.48 ; 1-14.2000.
- 20) 牧野カツコ.乳幼児を持つ母親の育児不安~父親の生活及び意識との関連~.家庭教育研究所紀要. 6 ; 11-24.1985.
- 21) 金岡緑, 藤田大輔.乳幼児をもつ母親の特性的自己効力感及びソーシャルサポートと育児に関する否定的感情の関連性.厚生指標. 149 ; 22-30.2002.
- 22) 岡田節子, 荒川裕子, 種子田綾他.母親の育児負担感と精神的健康の関連性.静岡県立大学短期大学部研究紀要. 17 ; 115-126.2003.
- 23) 石井クンツ昌子.ノルウェーの男女平等政策と男性の育児休暇.コミュニティ.120 ; 67-70.1998.
- 24) LaRossa,R.Fatherhood and Social Change.Family Relations.37.451-458.1988
- 25) 石井クンツ昌子.現代アメリカのジェンダーと家族研究;結婚,家事労働,母親と父親の役割についての考察.社会関係研究.3 ; 105-127.1997.
- 26) Lambet.M.E.,Generalization and Inferences about Causality in Research on Nontraditional Families. A Response to Radin,Sagi,and Russell, Merrill-palmer Quarterly.28 ; 157-161.1982.

- 27) Russell,G.,Primary caretaking and Role Sharing Fathers, InM.E.Lamb(ed.),Fatherhood.Applied Perspectives,Wiley,29-57.1986.
- 28) Coltrane,S. and M.Ishii – Kuntz. Men’s Housework.A Life Course Perspective. Journal of Marriage and the Family.54 ; 43-57.1992.
- 29) 小野寺敦子, 青木紀久代, 小山真弓.父親になる意識の形成過程.発達心理学研究. 9(2) ; 121-130.1998.
- 30) 住田正樹, 中田周作.父親の育児態度と母親の育児不安.九州大学大学院教育学研究紀要 2 ; 19-38.1999.
- 31) 住田正樹.母親の育児不安と夫婦関係.子ども社会研究.5 ; 3-20.1999.
- 32) 川井尚.幼少期の育児における父親の役割.子ども家庭福祉情報.12(8) ; 25-30.1996.
- 33) 加藤邦子, 石井クンツ昌子, 牧野カツコ, 土谷みち子.父親の育児かかわり及び母親の育児不安が 3 歳児の社会性に及ぼす影響~社会的背景の異なる 2 つのコホート比較から~. 発達心理学研究. 13(1) ; 30-41. 2002.
- 34) 高橋道子, 高橋真美.親になることによる発達とそれに関わる要因.東京学芸大学紀要, 総合教育科学系. 60 ; 209-218.2009.
- 35) 田村毅, 倉持清美, 岸田泰子, 木村恭子, 及川裕子.出産・子育て経験が親の成長と夫婦関係に与える影響~男性の子育て参加~.東京学芸大学紀要 6 部門. 56 ; 41-45. 2004.
- 36) 橘千恵, 中村絵里子, 中嶋夕美他.夫の育児家事行動の特徴と子どもへの愛着, 夫婦関係満足度との関連~妻との比較~.母性衛生.49(1) ; 65-73.2008.
- 37) 島崎志歩, 田中奈緒子.父親の生活実態と発達—就労・家庭状況, 子育て関与との関連. 昭和女子大学生生活心理研究所紀要.10 ; 109-117.2007.
- 38) 藤原千恵子, 日隈ふみ子, 石井京子.父親の育児家事行動に関する縦断的研究.小児保健研究. 56 (6) ; 794-800.1997.
- 39) Lamb,M.E., Parental Influences on Child Development , Paper presented at the Conference on Changing Fatherhood, University of Tilburg, the Netherlands.
- 40) 及川裕子.親性の獲得過程における変化とその影響要因の検討.日本ウーマンヘルス学会

- 誌. 4 ; 81-91. 2005.
- 41) 大橋幸美, 浅野みどり. 育児期の親性尺度の開発~信頼性と妥当性の検討~. 日本看護研究学会雑誌. 33 ; 45-53. 2010.
- 42) 森下葉子. 父親になることによる発達とそれに関わる要因. 発達心理学研究. 17(2) ; 182-192. 2006.
- 43) 鮫島雅子. 父親と母親における子どもの誕生に伴う「親性」の心理的変容~「親性」尺度の作成と因子構造の検討~. 日本看護研究学会雑誌. 22(5) ; 23-34. 1999.
- 44) 西尾敏, 中尾郁子. 父となる発達過程における「自由の制限」と親役割意識. 小児保健研究. 71(1) ; 67-73. 2012.
- 45) 蛭田由美. 父性意識の発達に関する研究~アンドロジニースケールを用いての検討~. 藍野学院紀要. 14 ; 33-42. 2000.
- 46) Darlling. C.A, Senatore N, Atrachan J. Fathers of Children Disabilities ; Stress and Life Satisfaction. Stress Health. 2011.
- 47) Bendixen. RM, Elder JH, Donaldson S, el. Effects of father-based in-home intervention on perceived stress and family dynamics in parents of children with autism. Am J Occup Ther. 65(6) ; 679-687. 2011.
- 48) Cabrera N, Mitchell S. An Exploratory Study of Fathers' Parenting Stress and Toddlers' Social Development in Low-Income African American Families. Fathering. 7(3) ; 201-225. 2009
- 49) 桑名行雄, 桑名佳代子, 坂上明子他. 乳児期における父親の育児役割とストレス. 宮城大学看護学部紀要. 4(1) ; 74-84. 2001.
- 50) 庭野晃子. 父親が子どもの「世話役割」へ移行する過程~役割と意識との関係から~. 家族社会学研究. 18(2) ; 103-114. 2007.
- 51) 岩下好美. 家庭役割と職業役割の調和~父親の家事・育児参加~. Preceedings. 格差センシティブな人間発達科学の創成. 16 ; 13-22. 2011.
- 52) 及川裕子. 親性の発達尺度の作成を試みて. ウーマンヘルス学会誌. 4 ; 93-102. 2005.

- 53) 岩田裕子, 森恵美, 前原澄子.父親役割の適応における父親のストレスとその関連要因. 日本看護科学学会誌.18(3) ; 21-36.1998.
- 54) 中嶋和夫, 斎藤友介, 岡田節子.母親の育児負担感に関する尺度化.厚生指標.46(3) ; 11-18.1999.
- 55) 中嶋和夫, 桑田寛子, 林仁美他.父親の育児サポートに関する母親の認知.厚生指標.47(15) ; 11-18.2000.
- 56) 冬木春子.乳幼児を持つ父親の育児ストレスとその影響~父親と子どもの関係性に着目して~.家族関係学.24 ; 21-33.2005.
- 57) 川井尚, 安藤朗子, 武島春乃他.父親の役割に関する基礎的研究~母親の役割とも比較して~.日本子ども家庭総合研究所紀要.42 ; 177-190.2006.
- 58) Grossmann.F.K.,Pollack,W.S.,&Golding,E. Fathers and children. Predicting the quality and quantity of fathering. Developmental Psychology.24 ; 82-91.1998.
- 59) R.S.Lazarus., Susan Folkman. (本明寛, 春木豊, 織田正美監訳) .ストレスの心理学~認知的評価と対処の研究~.第1班(第2刷).東京実務教育出版.1991.
- 60) 森下葉子, 岩立恭子.子どもの誕生による父親の発達的变化.東京学芸大学紀要総合教育科学系.60 ; 9-18.2009.
- 61) 北脇雅美.父親の育児参加に関する研究.保育研究.40 ; 37-42.2012.
- 62) 多賀太.仕事と子育てをめぐる父親の葛藤~生活史事例の分析から~国際ジェンダー学会誌.5 ; 35-61.2007.
- 63) 岩下好美.現代日本の父親とワークライフバランスの実態.Proceedings.格差センシティブな人間発達科学の創成.12 ; 1-10.2010.
- 64) 中島通子, 牛乃濱久代.立ち会い分娩における夫の意識.山口県立大学看護学部紀要.8 ; 41-47.2004.
- 65) 荒川治子.切迫早産の初産婦の夫の妊娠や出産, 父親になることに対する気持ちの変化~入院から出産までの追跡へ~.日本助産学会誌.20(2) ; 64-73.2006.
- 66) 常田美和, 平塚志保.早産児出生より1年間の父親としての経験~20歳代前半の男性への

- インタビューから～.看護総合科学研究会誌.9(3) ; 65-74.2006.
- 67) K市平成 22 年国勢調査結果統計表－職業等集計表－抽出群再集計（平成 26 年 4 月 30 日アクセス可能）  
<http://www.city.kurashiki.okayama.jp/dd.aspx?itemid=48576#itemid48576#itemid48576>
- 68) 厚生指標増刊，国民衛生の動向.厚生統計協会.東京；厚生統計協会編.2013.
- 69) 佐々木裕子.はじめて親となる男性の父親役割適応に影響する要因.母性衛生.50 ; 413-421.2009.
- 70) 桑名佳代子，細川徹.1 歳 6 か月児を持つ親の育児ストレス(1)～母親の育児ストレスと関連要因～.東北大学院教育学研究科研究年報.56 ; 247-263.2007.
- 71) 小笠原百恵.親になった男性の「親性」に関する文献研究.関西看護医療大学紀要.2 ; 11-21.2010.
- 72) 三上知美，掛谷益子.母親の育児ストレスと父親の育児参加に関する研究.国際ナショナル Nursing Care Research.10 ; 75-83.2011.
- 73) 川井尚，庄司順一，千賀悠子，加藤博仁他.育児不安に関する臨床的研究Ⅲ～育児困難感のアセスメント作成の試み～.日本総合愛育研究所紀要.33 ; 35-46.1996.
- 74) Yukiko Sato, Hitoshi Shiwaku. A study of difficulty in child-care during rapprochement crisis. International Journal of Nursing Studies.39 ; 51-58.2002.
- 75) 巽あさみ，小野雄一郎.「子どもを虐待しているのではないか」と思う母親の虐待の認識と背景要因の検討.医学と生物学.148 (2) ; 8-13.2004.

## 謝 辞

はじめに、本研究にご協力いただきました K 市調査対象のご父母の皆様に厚く御礼と感謝を申し上げます。

そして、研究の全過程において丁寧なご指導と励ましをいただきました指導教官の二宮一枝教授に深く感謝し、御礼申し上げます。また、本学位論文をまとめるにあたり、難波峰子教授には、客観的な立場から継続的にご指導・ご助言いただき、かつ副査もお引き受けいただきました。心より感謝申し上げます。

副査をお引き受けいただきました木本眞順美教授、増田雅暢教授には、ご多忙中にもかかわらず、私の盲点となっていた部分へのご指摘やご助言をいただきました。深く感謝申し上げます。

社会人として博士後期課程に在籍させていただいたため、何度となく業務の調整に快く応じていただき、また励ましや応援してくださいました職場の同僚及び上司に心より感謝し、御礼を申し上げたいと思います。

最後になりましたが、博士後期課程で励ましあい、ため息をつきあい、奮起しあえたアルチャナさん、佐々木純子さんには、お二人という仲間がいたからこそ、ここまでくることができました。心を込めてお礼を申し上げたいと思います。本当にありがとうございました。

